

## 人生最後の悪あがき

ふと気が付くとオレは今まで来た覚えのない細い道に立っていた。とりあえず辺りを見回してみても、見えるものはこの道とその道の両側に生い茂っている赤黒い藪、それに真っ赤な空しか目に入ってこない。

主人公「なんだよ……ここ」

夢だとしてもあまりにも不気味すぎる。でも、夢にしてはあまりにもリアリティーがあり過ぎる。

主「なんかすごく嫌だな、ここ」

まあ、声に出してもなにも変わらないが、そうでもしないと落ち着きようがない。しゃがんで一刻も早くこの嫌な夢から覚めることを祈ろう。

？「本堂卓美、本堂卓美、光が見える方向に今いる道を進みなさい」

突然学校の呼び出し放送のようなものが空から響いてきた。むろん聞き覚えのあるこえではないが、女の子の声だった。

主「光って、あっちか」

アナウンスのとうり道のはるか先にほんの少し小さい明かりが見えた。

主「あれに向かえばいいのか」

まあ、従ってみても悪いことはないだろう。それに何かすればこの夢も終わるかもしれない。そう思って、オレは光に向かって急いで走った。

今俺は見たことのない巨大な建物の前にいる。建物には門も塀もなく、玄関らしき鉄の扉があるだけだった。どうやらあの光はこの建物からのものらしい。看板も何もないから名前もわからないが、さっきの赤一面の景色よりはるかにマシになった。

主「ここに来ればいいのか」

あのアナウンスは光に進めって言ってし、その先にこれがあったてことはこの中に入ってもいいってことかな。

主「おじゃましまーす」

鉄の扉を開けると、中は予想に反して見たことのあるものだった。多くの椅子に、番号ごとに細かく分けられた受付、それに忙しそうに歩き回っている職員たち、そうまるで市役所みたいだった。

主「ほんとに、なんなんだ」

あまりにも意外な光景だ。一体誰がこんなところ利用するのだろう。

？「本堂卓美、本堂卓美、12番カウンターまで来てください」

受付もしていないのに、またしても謎のアナウンスに呼び出された。とりあえず、ほかにすることもなし、行ってみるか。何かいいことがあるかもしれないし。

12番カウンターの上には

『裁判説明係』

と書いてある看板がぶら下がっていた。

主「裁判説明係？」

なんだよそれ、裁判？オレは夢の中なのに裁かれないといけないのか。

主「無視しよう」

そういつて、後ろ振り向くと突然肩をつかまれた。

？「本堂卓美さんですね。さあ、カウンターまでお越しく下さい。地獄裁判について説明いたします」

今なにか、とてつもないこと言わなかった。この人。

主「え〜と、何の説明ですか？」

？「はい、地獄裁判です。そして、私はその説明係兼受付です」

聞き間違いじゃなかった。やっぱり地獄裁判って言ってたよこの人。そしてオレはどうしても確かめなければならないことができてしまった。

主「あのお姉さん（お姉さんというには若すぎる気がするが）」

受付「なんでしょうか？」

主「地獄裁判って、まるでここ死後の世界みたいじゃないですか」

受「ふふ、何を言っているのですか」

お姉さんはオレの言葉に笑って返してくれた。

主「そうですよね」

だから、オレも笑顔で返した。

受「そんな当たり前聞かないでください。さあ、説明を始めますよ」

拝啓 両親へ

もうすでに先だった息子をお許してください 敬具

主「オレって死んだんですか？」

本当にパニックに陥っていたせいか思いのほか大声が出てしまった。

受「はい。だからここいるのです。こちらが裁判説明のプリント、こちらはご本人様確認のプリントですので説明後書きこんでください」

そう言って、二つのプリントの束を渡してきた。

上司らしき人「おい、ミミ。課長がお前の使用した資料がどこに行ったか分からないって怒っているぞ」

受「えっ、すっすぐに行きます。本堂卓美さん資料に目を通しながらお待ちください。すぐに戻りますから」

言われた通り見てみると、それは裁判説明プリントではなく別のものだった。

本堂卓美 裁判資料

主「裁判資料？」

中身はほとんど興味のないものだったが、1つだけ目を引くものがあった。

本堂卓美の人生について

とりわけ悪行をしたわけでもないが、善行も少ない。地獄に落とす必要はないが、次の生でまた輪廻を回る必要がある

生まれ変わり候補

カタツムリ

チワワ

ナマコ（最有力候補）

イワシ

主「……なんだよこれ」

地獄には行かなくてよかったーって素直に喜べないよ。つまり、このままここにいるとオレはめでたくナマコとして次の人生（ナマコ生）を送る羽目になるのですか。

主「それは嫌だ。絶対にだ」

資料によるとオレは善行が足りないからナマコになるらしい。ということは、今からいいことをすればまた人間に生まれてくることができるかもしれないってことだ。

主「よし、善は急げだ」

オレは資料を手にとって、裁判所？から逃げ出した。

来た道をずっと戻ると、いつのまにか白い雲の中にいた。その雲を抜けると、眼下に街並みが見えてきた。

主「やった、帰って来たんだ」

まさか、帰って来れるなんて。半分くらい帰って来れないと思ってた。

主「とりあえず、家に帰るか」

そう思い、オレは町に向かって降りて行った。

主「なつかしい気がするな」

予想に反して案外あっさり家まで帰ってこられた。これが帰巢本能ってやつか。少し古い感じの2階建ての家。見覚えのある白いミラ。何よりの決め手は夕日の当たるベランダで気持ちよさそうに寝ている太ったネコ、ミカンだ。ミカンは意外なことに父さんが付けた名前だ。このミカンがいるってことは間違いなく我が家だ。

主「ただいま」

誰にも聞こえないと知りつつ、オレは声をだして挨拶をしていた。夕飯を食べているらしく、リビングの方からテレビの音がある。リビングオレを除いた残り3人の家族がいた。オレがいたころも食事中はわりと静かだったが、今はさらに静かだった。テレビの音が空しく響いているだけである。

主「オレがいなくてこんなにも寂しくなるのか」

そう思うと、あらためて死んだことがはっきり自覚できた。

夕飯後は3人ともそれぞれ別々のことを始めた。美佐は部屋に、両親はまだテレビを見ている。そして、オレはあることに悩んでいた。

主「オレってどうやって善行を積みればいいのだろう」

物に触れない、声も聞こえない。一体どうやって善行するんだよ。過去のオレの馬鹿！

とりあえず、気を取り直して妹の部屋に行ってみるか。うん、これは断じて妹を見たいわけではなく、あくまで何かいいアイデアを得るためだ。

主「それじゃ、おじゃまします」

美佐は机に向かい、一心不乱に勉強をしていた。人が入って来たのに少しも集中力が切れていない。まあ、オレはもう幽霊だしあたりまえか。邪魔するのも悪いし、温かく見守ろう。

……………退屈だ。見守り始めて15分ほどでもう退屈になってきた。それに今落ち着いて考えてみたら、人にも物にも触れず、声も聞こえない状況でどうやっていいことをすればいいんだ？なんかこう……念力とかポルターガイスト的な特殊能力みたいな何か使えないかな？

主「はああああああ」(美佐に念？を送っている)

何も起こらない。やっぱりそんな都合のいい展開なんてないか。

美佐「くしゅん」

今のひょっとして、念？が効いたのかな？だとしたら何とも地味な能力だ。ちょっと悲しくなる。これ以上念？で邪魔するのも悪いし、自分の部屋に行ってみるか。

主「もうオレの使ってたものも全部かたづけたかな」

そうなるとうちが本当に自分が消えてしまった気分になるなあ。見えないけど、まだいるのに。

主「あれま」

オレの部屋はオレが使っていたころのまま、いや使っていた当時よりきれいに感じた。床にチリやホコリもなく、机の上やダンスの上もきれいだった。

主「誰が掃除してくれているんだろう」

たぶん母さんか父さんだろう。美佐はオレが高校受験の時ほとんどかまってやれなくなってそれ以来ずっと疎遠だもんな。そのあいつが今受験生か。いろいろときつい時期だろう

な。もうオレは学校も試験も何にもないけど、美佐はまだまだ生きていくんだよなあ。

主「いかん、本当になんか暗くなってきた。えーい、気分転換だ。テレビでも見よう」  
しかし、居間では父さんが野球を見ていた。

主「念を送ってチャンネル変えられないかな」

こんな体じゃテレビ以外ほとんど娯楽がないぞ。やってみる価値は十分にある。

主「変われーーーーー」

父「はっくしょん」

……オレって本当になんか能力あるのかな？あつたとしても、くしゃみをさせることしかできないけど。

主「仕方ない、また美佐を見守るか」

そう思い二階の美佐の部屋に戻ってみると、美佐は勉強に飽きたのか携帯電話をいじっていた。

主「もう飽きたのか、1時間と少ししか集中力がないってなかなかやばいぞ。そのペースでの勉強じゃ受験に間に合わないぞ」

当然オレの注意など聞こえるわけなくこいつはケータイに夢中である。このままだったらメールとかしていると勉強時間はあつという間になくなるのに。

主「今は勉強の方が大事だぞ」

美佐「あーーーーもーーーー」

うおっ聞こえたのか。

主「落ち着け、本当のことを言っただけじゃないか」

美佐「どうしてずっと無視すんのよ」

なんだ、メールの話か。てゆうか勉強に集中したい受験期に相手の都合も考えずにメールするお前も悪い。

美佐「ふん」

美佐はそのまま部屋から出ると、ミカンを抱えて戻ってきた。

美佐「ミカン、またちょっと話聞いてくれる？」

美佐はミカンを膝に乗せると優しくなでながら話しかけ始めた。わが妹よ！いくら人に言えない悩みでもネコに相談するなよ、ネコに……

美佐「またね、有紀にひどいこと言っちゃったんだ。そんなつもりなのに……話しているとどうしてもなんかいつも喧嘩みたいになって、1年前までとても仲よかったのに……そういえばお兄ちゃんとも中学三年生の時に……」

なんか長々と愚痴りだしたぞ、ネコ相手に。なんて寂しいなん……ちょっとまで今閃いたぞ。妹を助ける→オレが良いことをした→ナマコに生まれ変わることはない。でも、どうやって助ければ、オレは今幽霊なんだ。

美佐「……ちょっと聞いているのミカン。だから……」

ひょっとしてオレって人や動物に憑りついたりできるのかな？今まさにミカンに憑りついたりできるかな？

主「うおおおおお」

オレは意を決してミカンに憑りつくことにした。といってもミカンに向かってダイブしたただけだが。

主「成功したのか……」

美佐「ふひやあああああああああああああ」

主「うるせえええ」



耳痛てえええええ。ネコになったせいかもしれないがいくらなんでもいきなり叫ぶ……  
まあ、ネコがいきなりしゃべったとなれば誰でも叫ぶか。オレ自身も驚いたし。

美佐「なっなに、え、空耳、えーとえーと……」

とりあえず、こいつの落ち着きを取り戻すのが先か。でないとオレも危ないかもしれない。

主「えーと、美佐。とにかく落ち着け……ってオレ普通にしゃべってる。体ネコなのに、  
どういうこと？」

普通に人の声が出たぞ。ネコなのに。落ち着けオレ、こういう時は手に人と書いて

主「わ～肉球だ～」

いや、喜んでいる場合じゃない。

主「信じられないかもしれないが、オレだ。お前の兄の卓美だ」

美佐「はあ？一体何？意味わかんない」

まあ、そうだろうな。オレもいきなりネコがしゃべったら同じようになるだろう。

主「いや、そう言われても、本当に卓美なんだから」

一体どんな証拠を出して証明すればいいのだろう？保険証ないし、指紋は肉球だし、てゆ  
ーか今のオレネコだし。

主「とにかく、オレは卓美だ。ネコに乗り移っているだけだ」

少々乱暴だがこれで押し通す以外解決策はないだろう。

美佐「本当に……お兄ちゃんなの？」

主「ああ、そうだ」

美佐「誕生日は？血液型は？小さいころの思い出は？」

主「誕生日は8月9日、血液型はA型、そして、お前は小さいころの冬にバケツにできた氷でオレの頭を殴った」

美佐「えーと、まだほかには？」

主「小さいころはいつもオレの後ろに引っ付いていたのに……」

美佐「あーあーわかったもういいよ。あんたは卓美でなぜかネコに乗り移った。それでいいのね」

主「納得してくれてありがとう」

よし、最初の問題はこれでクリアだ。

美佐「それで一体何しに来たの？まさか幽体離脱ってこと」

何しに来たって、素直にナマコになりたくないからお前を助けるって言ったらダメだろうしな。仕方ないこういう時は

主「その、お前のことが心配でな。つい戻って来ちゃったんだ。そしたら、何か真剣に悩んでいたから、ミカンに乗り移ってしまったてわけだ」

美佐「最高に余計なお世話よ。ちょっと、ひよっとしてあんた私の話全部聞いたってこと？」

主「ああ、そうだけど」

正直に言えば全部どころか半分も知らないんだけど、それ言ったら話が進まないから言わなくていいか。それにしてもこいつ顔赤くなってるな。まあ、一人でネコに話しかけているところ見られたんだからしょうがないか。

美佐「そっか、聞かれちゃったか。なら仕方ないか」

美佐のヤツ騒いだり、落ち着いたり忙しいな。

美佐「話聞いていたのならわかると思うけど、今さ、有紀とけんかしているんだ」

主「そうか」

本当か！二人ともすごく仲よかったじゃん。小さいころから家が隣で年も近いからずっと一緒に過ごしてたもんなあ。こいつらたまにひどい喧嘩していたけど今回は特にひどいらしいな。

主「原因は何なんだ？」

美佐「有紀にさ、ひどいこと言っちゃたんだ。もちろん、悪かったと思っているよ。でも、気持ちが悪く悪くなっていた時で、そんなこと少しも思っていなかったのについ言っちゃたんだ」

主「それはいつのことだ？」

美佐「春、4月の終わりくらいだよ」

4月の終わりってことは結構長いこと喧嘩しているわけか。

主「一応聞くけど、有紀と仲直りしたいんだよね？」

美佐「何言っているの、当たり前じゃん」

そもそも仲直りしたくないなら悩まないか。

主「ちなみに、何を言ったんだ？」

美佐「それは……言えない」

主「言えないって、それじゃあどうやって解決していいかわからないだろう」

美佐「言えないものは言えないの」

うーん、どうすればいいのだろうか？無理やり言わせるわけにもいかないし、かといってこのままでいいわけもないし、そもそもオレ自身いつまでこっちの世界にいられるかわからないし。

主「そうだ、いいこと思いついた」

美佐「はあ、何を思いついたの？」

主「オレが直接有紀にお前と仲直りしたいか聞いてやる」

美佐「ちょっと、やめてよそんなこと」

主「大丈夫、今のオレはネコだ。きつとうまく聞き出して見せる」

よし、方針は決まった。後は実行だ。有紀の家は隣だし、屋根からいけるはずだよな。そう思って、さっそく窓から飛び出し、有紀の家のベランダに飛び移ったとき、ふと後ろを見てみると、そこにさすまたをかまえた美佐がいた。

主「あれは通販で買ったきりほこりをかぶっていたやつ。あいつ、あれでオレを屋根から突き落とす気か」

美佐「動くと危ないよ、お兄ちゃん」

動かない方が危ないよ。こうしちゃいられない、はやいところ逃げないと。幸いこっちはネコだ。逃げ道はいくらでもある。有利なのはオレだ。

主「ふう、何とか逃げ切ったか」

有紀「ひひやああああああ」

あれ？なんかすごいデジャブ。

有紀「ネコが話した—————」

どうしよう、まさかこんな夜中にベランダにいるなんて。とりあえず、とりあえず

主「落ち着きなさい。人間よ」

有紀「はっはい」

そう言って有紀は深呼吸を始めた。

主「落ち着かれたかな」

有紀「ええ、落ち着きました」

主「そうですか」

いくら突発的だからってこのキャラはどうだろう。もう今更変えられないけど。

有紀「あなたは一体何者なのですか？」

主「それを知ってどうするのですか？あなたには関係ないことです」

有紀「そうですよね」

変な会話だが、これはもしかしてチャンスではないか。

主「時に、人間よ。お主悩みがあるのではないか？それも大事な人間と」

有紀「えっ」

目を丸くして驚いているが事実を知るとなんてことはないんだけどなあ。こうやって人はだまされるのか。

主「なぜ知っているかって。オレは人の心が読めるのだ、お主の心は悩みでいっぱいだ。もしよければオレが解決してやろうか？」

有紀「解決してくれるのですか？」

主「ああ、してやるとも。対価さえくれればなあ」

しまった！料金請求して断られたらどうするんだよ。

有紀「対価？ 何を支払えばいいのですか？」

よかった、断られなかった。でも難しいぞ。何を要求すれば断られないかな？

主「そうだな。この家のすべてのカニカマをよこせ、ないのならかまぼこでもよい」

有紀「あの……」

あれ？やっぱりダメか。

有紀「それでよろしいのですか？」

主「ああ、それでよい。わかったらとつとと話せ」

有紀「はい。実は向かいの家に住んでいる友達と喧嘩したっきりなかなか仲直りできないのです」

主「ほう、原因は？」

有紀「その友達には兄が1人いたのです。昔から彼女はその兄がとても大好きだったので、兄の高校受験中あまり話さなくなることがきっかけで、それ以来溝ができて大好きな兄と仲良くできないことがすごく嫌だったみたいです。そして、その兄がまた仲良くなる前に事故にあってしまって……私が話を聞いて病院に行ったとき面会謝絶で会えなかったのですよ。しょうがないので、友達と一緒に帰りました。帰り道に私はもう悲しくてわんわん泣いているのに……その友達が涙一滴も流さなかったんですよ。その時つい『お兄ちゃんが死んで悲しくないの？いくら仲が良くなかったからって』って思わず言ってしまったんですよ。もちろん、すぐに謝るつもりでした。そしたら彼女は『何？悲しいのは自分だけだと思っているの？』私も売り言葉に買い言葉で『あんただって、お兄さんのこと大好きだったじゃない！それなのに』って彼女にいったのです。そうしたら顔を真っ赤にして『そうよ、大好きよ。あんたからすれば私が事故にあった方がよかったかもね。邪魔ものがいなくなるわけだし』そんなこと言われたら黙ってるわけにもいきませんから、『そんな風に考えてたんだ、最低だあんた』って言ってしまったんです。こうして、私は、友達と好きな人だったその友達のお兄さんの両方を一度に無くしてしまったのです」

いや、まさかオレが死んだことでそんな問題が起こったとは知らなかった、疎遠だと思っていた美佐や有紀がオレのこと好きとは全く気付かなかった。いくら死んだあとでもこんなこと聞いてよかったのかな？



うん、あいつ何を持ってくるんだ？ そう思っていると、大量のカニカマをビニール袋に入れて持ってきた。

有紀「はい、約束のものです」

ああ、演じることで頭がいっぱいだったがそういえばカニカマよこせっていったな。そして、美佐よ、そんなジト目でオレを見下ろすな。

主「うむ、確かに受け取った」

オレは華麗に夜の闇の中に消えていった。まあ、ベランダから屋根に飛び降りただけだけどな。

主「ふう～ああ～カニカマうま～」

ああ、これで少しはマシなものに生まれ変わるかな？ てゆうか、どれくらいいいことすればいいかな？ そんなことを考えていると窓から美佐が帰ってきた。

主「よう、うまくいったか」

美佐「うん、よかった」

主「そいつはよかった」

美佐「つか、あんたよく考えたらきっかけになったっていうより、偶然いい方向に転がっただけじゃん」

うん、こういうのけがの功名っていうんだろうな。

主「まあ、いいじゃん。解決したんだし」

美佐「そうね。……ところで、あんたこれからどうするの？」

本当になあ、それはオレも知りたい。



主「ひとまず、またこの家で過ごすよ」

美佐「ほんと？ 天国とかどこかに行ったりしないの？」

その天国に行くとオレはナムコルートに入ってしまいます。

主「ああ、行かないよ。しばらくは美佐にお世話になろうかな」

美佐「そうなんだ。てことは……」

なんだ？ 美佐のやつぶつぶつと何を言っているんだ？

主「なにをにやにやしてるんだ」

美佐「にやにやなんかしてない」

主「そうか、それなら……」

あれ？ なんだ、力が抜けて

主「おい、み……さ……」

美佐「お兄ちゃん！ どうしたの、くるしいの？」

苦しくは……ない。ただ、力が抜けて

美佐「お兄ちゃん……バカ！ うそつき、私のこと心配して帰ってきてくれたって言ったのに、ここにいるって言ったのに、うそつき」

ごめんな、確かにこれじゃうそつきだ。全く、これじゃ人に生まれ変わるどころかチワワすら……

そして、オレの意識は真っ白にリセットされた。

目を覚ました時初めて聞いたものは耳慣れない機械の駆動音、初めて目に入ってきたのは

泣きはらしたように目が赤くなった美佐だった。

美佐「おはよう。お兄ちゃん、本当に意識が戻ったんだ」

意識が戻った？ オレって死んだんじゃないのか？

美佐「死んでないよ。意識不明でもちゃんと生きてたよ。だから、昨日ミカンになったお兄ちゃんが倒れた時、本当に死んじゃったって思って、心配で……」

そう言いながら、美佐はまた涙をぼろぼろこぼした。

美佐「よかったよ。本当に」

ああ、確かに、おかげでナムコルートフラグ？ はへし折れたよ。

美佐「言いたいこといっぱいあるけど、退院まで我慢するね。それじゃおやすみ、お兄ちゃん。ゆっくり休んでね」

そうだな、まだすごくだるいし、休みたい。でも、ひとつ聞かないといけないことがある。

主「なあ、美佐」

オレは精一杯の力を込めていった。

美佐「何どうしたの？」

主「ただいま」